源氏物語の社会学的評価について

2024.04.18to

源氏物語について、源氏物語の現代的捉え方で先ずはウオームアップとしたい。

源氏物語といえば、一般的に男女で捉え方が異なっている。古代の貴族社会における恋愛の世界が女性には魅力的であり、男性には単なる色恋の世界と捉えがちといってもいい。この違いこそが、視点の相違となって現代にも通じているといえ、文学的ならびに歴史的な必然性があることで、現代においても色あせることなく読み継がれているといえる。

そこで平安における社会と人間に着目してみると、貴族社会の日常において、恋愛、結婚観、結婚様相、などを介して、女性の生き方が最大関心事であった。作者が貴族の女性であれば当然といえる。もちろん、その背景には、女性は当時においても子供を産む道具とされており、主権がなかったゆえに、貴族社会における女性としての生き方を恋愛の次元で語り、多難な生き苦しさを世に問うたかったといってもよい。

本稿では、ﾄﾋﾟｯｸｽ的に項目を設定して、源氏物語の学術的な意義を引き出すことにする。具体的には、多くの方の論評を基にして、自分流の源氏物語の理屈付けとしたい。

1. はじめに

世界最古の小説と言われる源氏物語について、最近はブームとなって、現代訳本が多く出版され、NHK の2024年大河ドラマにもなっている。また、文学者や歴史学者による源氏物語講演会も多々催されている。その多くは、源氏物語の色恋や処世術的な立ち回りが関心事とあって、その関係の論述が多い。

そのなかでも、哲学と文学の学際域においては、物の見方が違っていて、それこそ今日的意味およびそれは本来如何にあったのか、するどく分析しているものも少なくはない。

本稿では、これまでの論評や主張を今日的市民視点で再構成してみることにした。まとめに際しては、物語がその背景や社会的事情に加えてて今日的な意味について扱うことにした。

2. 平安期貴族の男女関係

いきなり、源氏物語を構成するする日常の男女の関係から話を進める。なぜなら、物語全体を通して、男女行為で話が貫かれているためである。物語の解説の多くはこうした点からの解説も多い。よってここでもそうした観点を真っ先にもて来た。

まず、男と女の行動の特徴から見る。男は理性的思考の行動であり、女性の感性的な思考には大いに関心を持つ。逆に女性にとっては感性的な思考のもとでの行動であるゆえに、男性の理性的な行動に惹かれるということがある。今の時代も変わらない。こうした様相のニーズから、男女の関係性がつくられ発展するといえる。

では、そこに不倫の存在を如何に取るのか、また女性が男性中心の関係性に付属的な関係になっているのか。いうに及ばず、結果的には男社会の構成が男女の関係性を規定することになる。もちろん、平安初期には女性にも財産権があり、女性の地位は江戸期から戦後期までのようないわば虐げられた状態ではなかったが。

女性の立場からすると、色恋もじっくりと味わうならば、その社会性に築くこともまた言うまでもない。こうしたことが日常の行為として脈々と流れていることが物語の進展を身近なものにするのであろう。もちろん、貴族社会での単なる事象との批判もあろうが、作者が貴族社会の人間であるなら、それもまた当然なのであろう。なお、今日的次元から平安期の男女関係に学ぶ姿勢について、男性は女性への作用に対しての反応を見るとか、逆に女性は男性への作用に対し種々の好意で試しまくるともいう。これは今日の男女関係と変わらないという。

2‘. 源氏物語を批判する現代女性の意見

男性社会迎合の批判を。女性が男性に支配されて生きている。これを色恋沙汰にして愛の展開というのは片腹痛い。これに対し、そのような時代の女性の生き方として捉えるのも致し方なしの意見も多く、むしろ感情移入を楽しむことができるとの積極意見もあり。

3. 源氏物語の執筆目的

いつだれが書いたのかは不明であるが、紫式部日記の記述と整合するとして、作者は紫式部と言われている。しかし、何を目的に書かれたかは知る由もないが、天皇家を題材にして時の天皇の関心を得ようと時の権力者藤原道長の要請によったともいわれている。ある文学少女が気の向くままに書き綴ったとの見方もないわけではないが、やはり社会情勢のもとに書かかれるべくして書かれたとみるのが自然であろう。

となると、書き手の時代要請に対する捉え方として執筆意図がしっかりとあることになれば意図は何かが知りたい。それにはやはり当時の社会状況が問題である。古代から男尊女卑の社会であれば、女性の生き方や己の存在を問うのは至極当たり前であり、文才があればその才を持って女性問題を世に問うてみたくなろう。今日の女流歴史家の方は、紫式部は反骨精神旺盛で時代を越えて問うことが目的だと言い切っておられている。ただ、そこまでの闘争心あってのものというよりも、その時代に最大限ベストを尽くしたと

いうべきかと思うが、実際はどうであったろうか。

4. 構成

物語は3部で構成され、一部は主人公光源氏のサクセスストーリー、二部は光源氏の生涯後半期、三部は光源氏の子の半生である。二部から三部にかけて、話はどろどろとえげつなくなっているという。

ではなぜえげつなさまでを描写する必要があったのであろうか。上記項目の目的に挙げたように、時代の批判ということであればもっとエッセイのようにするとかはなかったのであろうかと思われるが、そこは文才でルポルタージュではなく現実に接近した物語で、ルポ以上にリアリテイを持たせることができたのであろう。

要は事実報道ではなく、人の感情・感性に訴えるのであるから効果抜群なのである。哲学者ローテイはいう、人を動かすのは理論ではなく文学である、と。

5. 読み継ぎ

当時の男性は漢文で文章を作成していた。平仮名は女性や子供用なのである。これが幸いして、女性は世代を超えて長きにわたって読み継いでいけたのである。ある人曰く、アングラ文化と。確かに。

そこで今一つ問題あり。当初は木版印刷技術もなく、写本は書き写しそのものとなると、正確に写本できたのであろうか。聞くところによれば、平安期の写本は全く存在せず、鎌倉期になってやっといくつかみつかった写本を基に、当期の知識人が検討を加えて、平安期の原文を作ったと言われている。そして、江戸期に入れば木版技術により、本が数多く印刷されたという。

6. 近代にて

天皇家の日常を記した物語は、天皇制時代では不敬にあたり、発禁処分となっていた。当時は天皇は神であり、絶対的存在であったので、源氏物語の描写は天皇制権威を失墜させかねないとして、圧殺されたのである。

戦後は自由民主の時代となって、源氏物語が蘇った。女性問題は今なお続く大問題ゆえに、源氏物語が読み継がれるのも道理である。

7. 古文を構成する文語体

古代期の文を古文と称し、現代の文は現代文もしくは単に文といったところである。古文が現代文に変遷した経緯を見ながら、古文の特徴を理解したい。

文学者によれば、当時の紙は貴重品であったことにより文語は密度濃く情景や情緒を盛り込み、また音韻を持ち味としたのである。その最たるものが短歌であったという。

そんな古文において、時がたつにつれ、文語体がより意味を分かりやすく、また発音がしやすい言語となっていった。この一連が市民化(カジュアル化)といえ、これにより、文語体が口語体に変わり、文語体イコール口語体となったといえる。

8. 現代訳

古文が現代文に表現され直す場合(翻訳)、古文の特徴として背後の状況のニアンス化やリズム・余韻がかき消えてしまっていることが指摘されている。このため、現代訳はその点をなるべく補うようにと心がけられてはいるが、文体進化の過程で欠落したものは回復は無理ということである。だからこそ、古文理解には古文の文体で解釈をしていくべきなのであろう。

9. 音読と黙読

古文の現代化により、今一つ失われているものがある。古文ではすべて音読する。例えば、和歌は音読の物。一方、現代はほとんどが黙読である。優雅に文を謳うということではなく、文は情報として捉えられているせいか、声出しは不要であるとされている。しかしながら、文学教育や人間教育の場合、言語の感性的要素の理解には音読がもっと進められるべきであろう。

10. 言語と文化

最近心理学では言葉と心を一体的に捉えるようになってきた。これに伴って、自己啓発にも言語を多用せる傾向が強くなり始めている。その一方では、そのようなアプローチは思考のロジックに言葉と心を乗せる方法であるだけに、真の心の問題とはかけ離れているとの見方もあり、言語として文学の機能をもっと理解すべきとの考えが活発になり始めている(哲学者ローテイの考え)。

このことを踏まえて、源氏物語を展望すると、言語と心はいうまでもなく言語と文化をもリンクさせることができる。これが感性からの文化性や社会性なのである。そしてまた、哲学的文学者の談によれば社会の在り方を示唆することもできれば国の在り方も視野に入ってくるという。

そうした文化論は科学技術を基調にした文明論とは大きく異なる。文明で社会を作り国をつくったとしても、文化性がない限り人間性はそこには望むべくもないだけに、文学の機能をもっと認識すべきである。よって、源氏物語は、世の中のブームからさらに一段踏み込んで、技術振興からの脱却への大きな流れをつくることになる。

11. おわりに

結論は上節のとおりである。そう考えると、源氏物語が世界初の物語としてあの時代に誕生し、今この世の中に大きな問いかけをしていることに改めて大きく驚ろくしだいである。

最後に本稿は、各種の朝活に加えて自由討議に基づいて自分流に編集したものであることを断っておく。末筆ながら、関係各位には謝意を表する次第である。